キタキツネのキキ 8

作　なかむら よしひろ

目の前でお母さんとニニがはねとばされるのを見て、キキは足がすくんで動くことができませんでした。でも気をとりなおし、お母さんたちの所までやっとのことで歩いて行きました。お母さんがニニにおおいかぶさるようにして倒れていました。

「お母さん・・・ニニ・・・」とよびかけてみましたがお母さんもニニもピクとも動きません。キキは自分の鼻をお母さんの体に押し付けてみました。それでも、やはりお母さんは動きません。キキに押されて横を向いたお母さんの口から赤い血が流れてきました

「お母さん、死んじゃったの、ニニ、だから道路に出ちゃだめだと言ったのに・・・」お母さんもニニも元気に走り回っていたときよりもずっと小さくみえました。

キキはこれまで「死ぬ」ということを話しには聞いていましたが、こんなに身近に見たのは初めてでした。キキは涙が止まりませんでした。その間に車が何台も通りました。でもお母さんとニニがたおれているのを見て、みなキキたちをさけるようにして通り過ぎていきました。

どれくらいお母さんとニニのそばに座っていたでしょうか。1台の車がキキの横にとまり、中からヘルメットをかぶった大きな人が出てきました。そのままキキの方に近づいてくるのでキキはあわてて道路わきの草むらに逃げました。その男の人はなにかぶつぶつつぶやきながら手に持った大きなナイロンの袋にお母さんとニニをむぞうさに入れ、そのまま車に積んで行ってしまいました。キキはその車が向こうの曲がり角を回って見えなくなるまでじっとしていました。さっきまであれほどおなかがすいていたのに、今はもうなにも食べたくありません。キキはとぼとぼとおうちに帰りました。

おうちの中にはあちこちにお母さんとニニの臭いが残っていました。キキは悲しくて悲しくてしかたがありませんでした。涙が止まりません。でもそのうち疲れて眠ってしまいました。よなかに入口のクマザサの葉がかさかさ音をたてるたびにお母さんやニニが帰ってきたのかと思い何度もなんども目をさましました。そしてあらためてお母さんもニニもここに帰ってくることはもうないのだと思うと、また涙が出てくるのです。

まる3日も巣の中でうずくまっていたでしょうか、ようやくキキは外に出てみようという気になりました。キキはよろよろと巣からでて山を下り道路にでて行きました。どうにもならないこととわかっていたのですが、お母さんとニニのひかれた場所にいってみました。ちょうどそのとき子どもをたくさん乗せたワゴン車がやってきて、めざとくキキを見つけて止まりました。ドアが開いて子どもが3人と大人の女の人が降りてきました。子どもたちはキキに近寄ってきて手に持っていたお菓子をいろいろ投げました。久しぶりに口にするお菓子はとても甘くて、キキは目の前になげられたお菓子を次から次に食べました。キキがおいしそうに食べるので子どもたちもどんどんお菓子をなげてくれました。そのようすを写真にとっていた女の人が「みんなもういいでしょう、さあ車に乗って」と言うと、子どもたちはなごりおしそうに車にもどりました。車が動き始めたとき、窓があいて女の子がチョコレートをひとかけら投げてくれました。キキはすかさずそれも食べました。

（5月号へつづく）

「キタキツネのキキ」は、金山・落合診療所の中村義博所長が創作された物語で、平成18年9月号から連載で紹介しています。

中村先生は、毎日通勤のためかなやま湖畔を通ると、通りがかりの車に餌をねだるキツネをよく見かけ、「車にひかれてしまう」と心配していた矢先に一匹の子ギツネが死んでいるのを見つけました。親ギツネがその子ギツネをしきりに舐めている姿がとても哀れに思い、キツネが道路に出てくるようになったのは、誰か通りがかりの人から餌をもらい味をしめたからで、餌を与えるという何気ない行為が実は彼らを不幸にしていることを知り、この物語を書き始められました。

作者の紹介
中村　義博 さん
（なかむら　よしひろ）

川崎医科大学を卒業後、同附属病院で救急医、大阪府立病院で麻酔科医、静岡県の聖隷三方原病院で救急医を勤めた後、長野県の奈川村国保直営診療所、門別町立国保病院で地域医療に従事され、平成16年8月から落合診療所と金山診療所の所長として勤務されています。

□発行／南富良野町役場　編集／企画課 広報統計係　Tel.52-2115
□ホームページアドレス http://town.minamifurano.hokkaido.jp

古紙配合率100パーセントの再生紙を使用しています。